国の方針は「40才以上」の人が「2年に1回」だけど……

1年に1度はマンモグラフィーと超音波を併用するのがベスト

都内に住む主婦のA子さん（52才）が言う。

「北斗さんのニュースを見て急に心配になったんです。私も親戚にがんになった人はいないし、検査は痛いって聞くしお金もかかるし、また今度でいいやって思っていたけど、怖いなって。それに私みたいな主婦は、検診っていわれても、どこでどんな検査を受ければいいのかわからないんですよね」

A子さんと同じような人は多いだろう。国の方針として、乳がん検診は「40才以上の女性を対象に、2年に1回」と推奨されており、多くの自治体は、40才以上の女性に2年に1回検診を行うよう通知を出している。通知を受け取ったら、市区町村の指定された病院や施設で検診を受け、その費用は（自治体によって異なるが）無料で実施しているところが目立つ。主な検査方法は視触診とマンモグラフィー（乳房エックス線検査）だ。

しかし、2年に1度の検診で大丈夫なのだろうか？

ピンクリボンブレストケアクリニック表参道の島田菜穂子院長が言う。

「基本的には30才を過ぎたら1年に1回くらい定期的に受けるといいと思います。特に初めての検診はマンモグラフィーと超音波（エコー）検査を併用したほうがいいでしょう。というのも、マンモグラフィーと超音波はそれぞれ、長所短所があるからです」

マンモグラフィー

乳房をX線で撮影する検査法。乳房を撮影台の上にのせ、プラスチック板で厚さ4～5㎝まで圧迫し、左右それぞれ方向を変えて4枚撮影する。しこりがなくても、乳腺の歪みや石灰化を探知し、腫瘍が発見できる。料金は1回5000円前後。

超音波(エコー)

乳房にゼリーを塗って、その上に端子をあてて内部を観察する検査法。体への負担はほとんどない。数㎜程度の小さなしこりを見つけ、その性質や形状が詳しくわかるため、腫瘍の発見につながる。料金は1回3500円前後。

乳がん検診には、医師が目で確認し乳房を触れて調べる「視触診」のほか、マンモグラフィーと超音波の2種類がある（上写真例参照）。

島田院長が続ける。

「30代までは超音波、40代からはマンモといわれるのですが、それは若い人は乳腺が発達しているため、たとえしこりがあったとしても乳腺に隠れて映らないことがあるからです。でも乳房は個人差がありますし、1つの検査だけだと、いずれも約15%の人は見つからないといわれています。

マンモはX線を使うので放射線被曝するという指摘や、海外ではマンモによって起きる不利益について述べた論文が話題になりましたが、適切な方法で行えば被曝に関しては1年に1回は問題はありません」

乳がん検診は保険適用外だが、しこりがある、違和感があるなど自覚症状があって検査する場合は保険が適用されることも覚えておきたい。

近年注目されている検査法に「3Dマンモグラフィー」がある。医師で医療ジャーナリストの森田豊さんが説明する。

「現在、広く用いられるマンモグラフィーは二次元で、乳房を挟んで上から1枚の画像に撮影していましたが、**3Dマンモグラフィーでは一度の撮影で1㎜毎に、乳房の断面図を何十枚も撮影します。検査費用は2万円程度。そんなに強く胸を押さえないので痛**みも少ない。

また、従来のマンモ
ィーだと乳腺組織に
こりが見落とされる
りましたが、その確
に低くなる。すでに
1800台の機械が導
ています」

画期的な検査法だが
で導入されている検
病院は健康院クリニ
京都）、新百合ヶ丘
（神奈川県）など、全
か所程度。

その理由に〝検診率の
があげられる。

「日本の乳がん検診率
程度です。欧米の70～
ら比べると圧倒的に
〝がん検診の発展途上
いっても過言ではあり
3Dの機械はとても高
ンニングコストもかか
検診率を高めるととも
Dの機械を広げていく
ふうに両方の車輪を回
かないと広まらない
う」（森田さん）

「若いから大丈夫」「たぶんがんじゃありません」に要注意

少しでも「あれ？」と不安に思ったらセカンドオピニオン

北斗の乳がん発症が報道されて以降、乳がん検診を希望する女性が一気に増加している。これまで「自分は大丈夫だろう」と思っていた人でも、なにか〝異常〟が見つかるかもしれない。その場合、どうなるのか。

濱岡ブレストクリニッ
長の濱岡剛さんが説明す
「検診で何か異常が見つ
ば細胞診や組織診という検

が待っています。細胞診は第一段階として行うことが多い検査で、この検査で乳がんが疑われたら、さらに組織診という検査をします。

組織診では、がんかどうかが確定され、乳がんの種類、進行度、悪性度まである程度わかります」

なぜこんなにも検査の回数を重ねなければならないかというと、乳がんは乳腺症や乳腺炎などと区分するのが難しく、腫瘍を「がん」**だと確定しにくいのだ。そのため、見逃されてしまうことも少なくない。**

'05年、37才で乳がんを発症した女優の宮崎ますみ（47才）も、そのひとりだ。

「乳がんだと発覚する2年前から、胸にしこりがあるのを感じていました。

たまたまボディーオイルを塗っていた時に、右胸に大豆くらいの小さなコリンとした硬い物が埋まっている感覚がありました。それで、一応検査しようかなと、'05年までに2回検査を受けました」

しかし、その結果はいずれも「悪性ではないだろう」というきわめて曖昧なものだった。そして、'05年、偶然にも知り合いの医師に血液検査をしてもらったことで、がんが発見された。

「血液検査をしたら、白血球の数値が異様に高かったので精密検査を受けました。

そしてこれまで受けていたエコーにプラスしてマンモグラフィーを受けたんです。でもその結果は〝たぶん悪性じゃないと思います〟でした。そしてその先生が帰り際に、〝一応、細胞診しておきましょう〟って。そしたらその5日後、乳がんだという結果を伝えられました。

私は、'05年よりもずっと前から、がん患者だったということなんです」

前出の森田さんは「根拠もなく安心させる医師は要注意」と注意を促す。

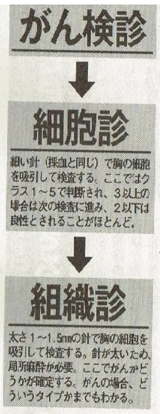
「〝若いから心配ない〟〝たぶん大丈夫〟などと、気休めを言うのはあまりいい医師ではありません。むしろ悪いこともしっかり話してくれるのがいい医師です。何か不安を感じたら〝違う先生にも診てもらいたいから紹介状を書いてください〟とセカンドオピニオンを申し出てください。それで態度を変えるような医師はその時点でアウト。違う病院に行きましょう」

〝たぶん大丈夫〟——誰もがそう思いたい。自分自身を安心させたい。しかしそれは危険なことだ。静岡県に住む51才の主婦・B美さんは、**昔から定期検診を受けていたが、いつも「乳腺症」と診断されてきた。**そのため、30才の時、40才の時にそれぞれ「経過観察」を言い渡されてきた。

「48才の時に主人と一緒に人間ドックを受けました。そこでマンモグラフィーを受けた。それまではほとんどエコーだったんです。**その日のうちに、〝乳腺外科のところに行ってください〟と言われ、また〝乳腺症かなぁ〟と思っていたら、送られてきた結果には『乳がんの疑い』と書いてありました。**

がんセンターを紹介され、手術を受けることになった時、私よりも焦る夫を見て、涙が出てきましたね。

私のがんは進行していて、8㎝以上あり、リンパには14か所も転移していました。私は右乳房を全摘出し、放射線治療を1年3か月やって、今は経過観察中で元気に暮らしています」



がん検診

↓

細胞診

細い針（採血と同じ）で胸の細胞を吸引して検査する。ここではクラス1～5で判断され、3以上の場合は次の検査に進み、2以下は良性とされることがほとんど。

↓

組織診

太さ1～1.5㎜の針で胸の細胞を吸引して検査する。針が太いため、局所麻酔が必要。ここでがんかどうかが確定する。がんの場合、どういうタイプかまでもわかる。

発見された時は○㎝、それって初期なの？ 末期なの？

乳がんにある種類とステージ

がんの進行度合いを表すのに「ステージ」という言葉がある。しかし、〝ステージⅠは助かる可能性が高い？〟〝ステージⅣは転移している？〟と、きっちり説明できる人は少ないだろう。

医学博士で日本乳癌学会乳腺専門医の南雲吉則さんが説明する。

「まず、乳がんの種類は大きく分けて、転移をしない極めて早期の〝非浸潤がん〟とがん細胞が血液やリンパにのってほかの臓器に転移する〝浸潤がん〟の2タイプに分けられます。また、病期はステージ0～Ⅳに分類され、数字が大きいほど進行していることを示します（下表参照）。

しかし、治療法や生存率はステージだけでなく、悪性度、タイプなど種類によっても変わってくるので、あくまで、参考程度にしましょう」

ステージ分類

非浸潤がん	浸潤がん			
初期	早期		局所進行性	末期（遠隔転移）
0期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期
「前がん」といわれる初期のがん。他に転移する可能性は極めて低く、生存率は90%以上。	2㎝以下の小さなしこりで、リンパ節への転移が見られない状態。	2㎝以下のしこりでリンパ節に転移している状態、もしくは5㎝以下の大きなしこりでリンパ節に転移して	5㎝以上の大きなしこりでリンパ節への転移の可能性が高い状態、もしくはリンパ節への転移が複数見られ	肺や骨、脳など、がんが他の臓器にまで転移している。